



生命環境科学コース教育実践のこの4年

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): Life-Environment Science Cours, reformed education program, pre-seminor plan, huge class, position of the minor education 作成者: 富士川, 計吉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2848

生命環境科学コース教育実践のこの4年

富士川 計吉*1

The 4 Years' Practice for the Reformed Curriculum in the Life-Environment Science Course of the Minor Education Program

Keikichi FUJIKAWA

(論文受理日 平成9年8月20日)

Abstract

Being in charge of the reformed education program for these 4 years, the existence of the unexpected problems have been recognized. Last year our staff worked to remove the part of these problems in the pre-seminor plan and the huge class. Moreover as the term spent for the practice was not so long, the more difficult problems still remain for the future. Especially for the time when this course may grow up as the complete education system, incomplete parts of this course program were pointed out at this moment, for instance, the position where the course stood in the total system. Although the course has many kinds of the future problems, it has progressed in the last review and also gained the promising step for the next years. The author wishes the still more unique advance in the substance until the next remaking chance.

Key Words: Life-Environment Science Course, reformed education program, pre-seminor plan, huge class, position of the minor education

1. はじめに

(改組再編以前)

昔々、一般教育等で要件単位とされた36単位は、その後専門科目によって一部を読み替え可能となり、24単位までせばめられた。これによって救われた学生は少なくなかったのではなかろうか。しかし、一般教育の開設科目が減ったわけではなく、一般教育の教官が減ったわけでもなかった。学生の志向の多様化に対応した苦肉の策であったのかもしれない。多様化対応措置としてはその後も大小いくつかの方策がとられた。

平成5年、一般教育の改組再編によって、いわゆる教養教育から副専門としての専門教育に変貌し、旧一般教育のグループは要件単位のうち、主専門関係88単位に対する副専門36単位の部分に、新たな意味付けと責任

を担うこととなった。

(改組理念から)

一般教育の改組の理念などは、1992年(平成5年)4月に大学により公表された「改組再編の現状と課題」の中で、以下のように述べられている。先ず、一般教育は「カリキュラムの画一化のために学生の自主的勉学意欲に十分応えられず、学習意識の低下を招きがちである」など、3点の問題を抱えて「教育目標と現状の間に乖離が生じている」とした上で、改組再編へと向かった。

新たに計画された副専門教育課程では「専門分野に偏狭することなく広い視野をもつべく広範囲の科目を設定し、かつ、それらの科目を全学生が共通的に履修する共通科目と、目的別に組織的に整理されたコース別科目に分けて履修する」ことが規定された。

主専門と副専門を関係づける教育目標などについては、「4年間一貫した学部一体の教育を行うこととし、主専門科目群とこれとは別に専門教育とは性質の異なる複眼的な視点から専門教育を補完するための副専門科目群を

*1 応用化学科

配する」とうたった上で、「現代社会において工学系大学卒業者に必要と思われる基本的な資質、すなわち専門分野に偏狭することなく広い視野に立つ総合的価値判断能力を備え、深い見識を身につけ、応用技術者としての活躍を期すこと」を目的とする。

このように、5つの副専門教育コースが誕生したが、ここに設けられた生命環境科学コースの目標では、背景に「最近の科学の進歩は生命現象についての知見において大きな飛躍を遂げ、バイオテクノロジーと呼ばれる新しい技術が生まれてきた。また、近年の工業の発達とともに、環境問題について様々な問題が生じてきた」ことを指摘し、「したがって、これからは生物と自然との調和ある環境を生み出す視点に立って、科学・技術を考えていかなければならない。生命環境科学コースでは、「科学と生命環境」をテーマにこのような分野についての基礎的な知識を学ばせ、グローバルな視点にたつて社会に奉仕する技術者の養成に資することを目的とする」ことが掲げられた。

以来4年間、生命環境科学コースは大小の新しい問題に直面し、その一部分は昨年度の教育課程の見直しにより改善されたものの、その作業などを通して根の深い宿題を抱えているとの認識に到達している。

2. 生命環境科学コースへの学生の分属状況

(新たに直面した問題)

各コースへの学生の分属希望が、5つのコース間でバランスしない。生命環境科学コース(以下、生環コース)は常に定員(130人)オーバーの状態が続いた。希望のとおりに分属を許すことは物理的にも不可能なため、約1か月かけて、希望の変更を募った後、志望理由書を提出させて選考をした。

(志望理由の分析)

ある年度の、142人分の志望理由の要点を抽出し、共通項目にまとめた。(表参照)

志望理由書を読んでまず感じたことは、これらの学生は自分自身の理由で志望したのであって、決して他人の理由に同調や便乗したものではないことである。「単位を取りやすいから」、「周囲の噂を参考に」、「仲間との相談によって」等の消極的依存体質を見ることはなかった。とはいえ志望理由は様々であり、全体を簡単に分類することは難しい。まず、次の3項目に該当する者をまとめてみた。「生環コースを選んだのは、1. 主専門の補完として、2. 自己本来の興味から、3. 主専門並の強い動機から」である。その結果、全体で1. 37%、2. が46%、3. が8.5%であった。ただし、一部分は1. と2.の両方に

表 平成7年生命環境科学コース志望理由の項目別まとめ

学 科	志望者数	項 目					
		1.	2.	3.	4.	5.	6.
建設システム	24	14	9	1	7	0	1
機械システム	26	13	4	1	6	0	0
電気電子	18	6	8	1	4	0	0
情報工学	17	3	8	0	5	4	0
材料物性	20	6	12	0	4	0	2
応用化学	37	11	25	9	6	4	0
合 計	142	53	66	12	32	8	3

該当する。3.の数字について、後述のように担当者の一人としてある種の重みを感じている。

自己の志望を決めるにあたり、入学前に読んだ大学案内、コース分属説明会資料、副専門編シラバスが参考にされた。かなり多くの人が大学案内によって生環コースを知り、早くから分属の希望を決めていた。その中には、「他大学の環境系の学部や学科を受験して入学を果たせなかった」者や、「以前から勉強してみたかったものを見つけた」者もいる。また、シラバスを読んで、自分の主専門の内容を補強するコースと位置づけ、「生命環境科学の学習が是非必要である」という者や、「環境配慮のできる建設あるいは土木技術者になりたい」(建設システム)、「自動車や宇宙などの技術にとって必要である」(機械システム)、「クリーンエネルギーなどについて理解したい」(電気電子)などの者が含まれている。生環コースの化学分野の比重が大きいことが応用化学科の学生の多いことに直接つながる。

環境保全のために「積極的に参加しようとする意志の表明」は表の項目4.であり、23%あった。表に示していないが「もっと認識を広め深めたい」というのが、その他のほとんどの者である。言うまでもなく、後者の中から前者の23%をできるだけ大きく育てるのも生環コースの大切な役割であろう。

項目2.の「自己本来の興味から」の中には、「高校時代に勉強した化学、生物、地学を生かして学びたい」者が多数いる。一方、項目5.には「高校で学校の事情や大学受験の都合で勉強できなかった科目を、この機会に勉強したい」や「高校時代に学びたかったが機会が与えら

れなかったので、生環コースで学びたい」とした者が含まれる。理科への興味には、見近な経験との密接感や未知の世界の征服感もあり、学校で定めるプログラムに制約されることなく、生涯持続するものがある。一つの専門に自己を当てはめようとするよりはむしろ、これまでに抱いてきた種々の今日的で広域的な疑問や関心の追究へと、専門領域を越えて自己を広げようとする傾向が表れており、「総合科目を勉強してみたい」などとも述べられている。最近の社会人教育あるいは生涯学習の理念とも通ずるものが大学初年の学生に既にもあるように感じられる。将来再び生命や環境に関する専門あるいは教養の勉強をする可能性があるとするれば、この時期にアウトラインを知っておくことは意義深い。

項目 6. は「ある先生の地震にの新聞記事を見て」など、報道等からの影響で選んだ者を示す。その段階ですでに、在学校での情報あるいは出版物などから環境問題についてある程度見聞を広げ、問題意識も高まっていて、「この機会に是非専門的な勉強をしておくべきだ」や「本当に興味を引くのは環境の勉強なのだから是非学ばせて欲しい」などとなったようである。こうした問題意識の高まりは志望者のほぼ全員に感じられる。NHKのテレビ特別番組や自然災害の体験なども発端となり、生命と環境は直接間接に広範な学生の関心を引いていると強く感じる。

(今後の課題)

志望理由の中で「他のコースで学びたいものがないから」とした者もあり、「主専門に一途に関わりたいのか」あるいは「ほんとうは何をしたいのか」と問いかけてみたくもある。とりあえず生環コースに分属させることとしたが、少数派とはいえ副専門全体の検討課題とした一件である。本学に入学する学生は必ず副専門を学ばなければならないとした根本的な理由を問いたい。

項目 3. の「主専門並の強い動機」の中に、「大学での研究テーマとして環境問題に取り組みたい」という者がいる。こうした高いレベルの教育を求めて生環コースに分属した学生に対し、十分保証する体制が現在できていない。所詮副専門にすぎないが、知識を伝えるのみの教育に終わるのではなく、所属学生のある部分を研究の領域に導いて、学生と一体でつくる学問的創造体制への成長が今後の大きな課題の一つである。学生を研究の活動や方法に触れさせ、真に自己の学問的興味を発見できるように彼らを導くためには、現状のままでは物理的に困難な面もある。つまり、一般教育時代のままのスタッフ専用研究体制であれば、副専門としてどこまで学生の要望に応じてあげられるだろうか。誠に乏しい限りであり、将来の発展性さえも望めないなら、生環コースは看板倒

れに終わってしまう。

3. 改組再編教育課程の評価と課題

3.1 生命環境科学プレゼミナール

(プレゼミナールの実情)

プレゼミナールが発案されたのは、一般教育における多人数教育の弊害が指摘されていた背景がある。「先生と学生間に十分なコミュニケーションが成立していなかった」とされたが、改組案にはどのようなコミュニケーションをするべきかは明らかにされてはいない。授業の内容に関する限り、授業中に双方向の対話が可能になるクラスの大きさは、私見では、7~80人が限度であろうと考えると、改組にともないプレゼミナールの現行形式(1教官に学生20名)が導入されたねらいが未だ判然としない。

(ある中間報告とその後日談)

ある担当教官が「プレゼミナール寸描」と題して、学生部ニュースに報告したものを抜粋再録する。これは生環コースにおいてプレゼミナールを担当した7名の教官からのアンケートへの回答をもとにしてまとめられた。

質問事項:

- (1) 実施中のプレゼミナールの形式(講義、ゼミ、その他の形式など)
- (2) 現在感じている問題点
- (3) プレゼミナール開講の目的、意義をどのように考えているか

回答:

- (1) ゼミ形式と回答したのは、7人中4人であった。その他、講義形式あるいは講義とゼミの複合形式が2人で、施設見学が1人であった。
- (2) 学生の語学力不足のため意図した通りに進まず、意見や質問が全く出ない。資料を棒読みするなど把握力に問題がある。出席状況不良など意欲がない。欠席者にはペナルティーをつけてみた。発展性のない見学のみで終わった。
- (3) 1年生後期では時期尚早だ。意義目的がはっきりしていない。意義目的がよく理解できない。時期的に不适当。必要性に疑問あり。ポリシー不明で効果も期待できない。意義不明ではあるが、少人数教育という点ではインパクトがあったと思う。

後日、こうした状況を検討する会合において、ある教官は「第1志望で分属されたはずなのに」と、学生に積極的な参加態度が見られないことを嘆いている。

改組が前倒しで実施されたこともあり、全ての担当者が互いに検討を尽くす時間も与えられず、結局、プレゼミナールの実施方法も様々ながら、実施しての評価にも前向きな意見が見あたらぬ。

新しい形の教育なので、担当者は教育の専門家として工夫し試行錯誤する役割があるとはいえ、教育内容よりも、学習態度や、ものの言い方、約束履行などの”行儀教育”を繰り返す時間が続いたら、副専門教育の目的とは全く異質のものが課せられているようで、ジレンマを感じてしまう。また、あるときは「コースへの円滑な導入をはかるため」ともいわれるが、その場合、導入にあたってかなり高い密度での個人的接触を必要とする分野に限定してプレゼミナールを実施するのが効果的である。ただ単に”少人数でコミュニケーションをはかる”という目的不明確なままのプレゼミナールという方法設定を、担当者に押しつけるのはどうだろうか。

(今後の課題)

担当を2度経験したある教官は次のように述懐する。

「学生は学科を横断した形で行うゼミ活動の意味を見いだせずに終わる」、 「現在の学生数に対して少なすぎる教官数のため、学生が担当教官を選ぶ自由がなく、さらに、一つのゼミに20人以上が集まるのでは少人数とはいっても一体感に欠ける」、 「学生の主体的な参加が前提となるゼミの性格から、必修科目とはしないで、選択にすることについても十分に検討するべきである」

この指摘から、学科横断型、学生が教師を選ぶ自由の保証、一体感の出せるゼミナールの規模、必修選択の設定について、さらに、ゼミナール室の完備などの宿題も現在なお残されており、場合によってはプレゼミナールの廃止を含む、十分な検討を続けるべきである。

この現状を、今後改善する方向として、

- ①教官と学生の間で個人的接触の物理的に保証された状況をつくり、そのためにも、
- ②予めシラバスなどのできるだけ詳しいプレゼミナール活動内容の紹介がなされている必要性から、内部的検討を尽くした準備がなされ、
- ③どのように成績評価(単位付与)をするかも明瞭に示されており、
- ④学生には担当教官やテーマを選択する自由が与えられているためにも、相当数の教官の参画の下に、選択科目とすることであろう。

「少人数教育とはゼミナールである」という短絡は、最悪の場合相当大きな危険性をはらむ教育方法であり、上述のように否定的な反省が強まるばかりで、改良につ

ながる発想の生まれにくい雰囲気でも固まってしまう。こうした新しい形を実践に取り入れるとすれば、準備に手間暇をかけ、例えば、成功している各種のゼミナール活動を分析し、学ぶべきである。この点でも、この度の改組再編は見切り発車の感が濃厚で、「後のことは走りながら担当者各位において良きにはからいなさい」となってしまったことは、質的に大きな負担を担当者に押しつけたことになる。

また、「低年次ゼミナール」では専門的な基礎知識も、大学あるいは専門分野に特有な学問的方法論もほとんど通用しないし、こうした方法を教授することにも無理がある。この場合、「教官と学生の個人的で人間的な交流が決定的といえるほど重要になる」が、極端な言い方をすると、おしゃべりタイムにもいたらずに終始する。明確な目的設定がなく、教育者として学生にどのように接すれば期待される効果があげられるのか、ヒントすらもない。

こうした新しい教育実践から出てくる知見などを適宜汲み上げ、深めていくことのできる場が、副専門の中に用意されていない。

3.2 マンモスクラスの発生要因

(マンモスクラス発生)

クラスの人数がおおよそ80名以下なら1~2か月間で顔と名前が一致する程度に把握して授業ができる。こうしたわけか100人に近づくとクラスが名もない顔もない大きな一つの塊のように感じられ、一方的に知識の伝達がなされ、その努力がどこかに吸い取られていくばかりで、心身の消耗が異常に激しくなる。

生環コース発足2年後に、はじめて定年退職者があり、後任としてそれまで主専門の応用化学科教官が生環コースのコース別科目を担当することになった。この教官から、2年間担当の後日談として次のような意見が寄せられた。

主専門科目とは異なり、学生の基礎知識や関心もまちまちなので「少なくともこれだけは知ってほしい」という講義ではあまり教育効果が期待できない。そこで、古典的な”積み上げ型”の講義を止めにして、複数の副読本から”水と生命”という主題に沿った内容を拾っていく方式で講義を行っている。準備にかなりのエネルギーを要するが学生のレポートをみていると、強い関心と興味を示す学生が出てくる。ところが受講者120名以上という現状はあまりにもマンモス授業であり、せめて40から50人位で、学生の表情が見えて、やりとりのしやすい授業にできないものかと感じる。

古代の環境で滅亡したマンモスが、改組再編後生環コースにマンモスクラスとして”生還”した。ある科目では、改編カリキュラムを実施してみて、履修申告者が異常な人数にのぼった。1名の教官が担当する一つの科目で860人もの学生を相手にした例は、これまでの本学の講義にはなかった。結局、3クラスに分けて授業をしたために、教官の負担時間も3倍に上がった。改組の理念に従い、専門性を深めていくねらいがあるなら、このようなマンモスクラスの生じたことは、理念とは逆の方向に現実が動いてしまったことであろう。「根本的にはスタッフ不足とメニュー不足である」との指摘はできようが、スタッフ数は現状のままに凍結された改編なので、開講時期をにらみ、並行あるいは隔年授業などの方法をとって学生にも安心して授業を受けることのできる道を保証しつつ、受講者数の分散をはかるのが従来からの知恵であった。詳細の検討に手抜かりがあった。

(今後の課題)

入学時の履修方法説明会では、単位を揃えることについて詳細に述べられる。その中身は決して簡潔ではないが、新入生は手持ちの単位が零なので、誰もが渴いた旅人のように単位取得に走る。その結果、初年生の受講者数が最も多くなり、学年進行と共にこの傾向は減る。そこに、学年による学生集団の気質的な状況がある。高学年になると勉強の姿勢も成熟してくる。この時期をとらえて深い専門内容を学ぶのもよい。こうしたことは経験により承知している。副専門で新しい試みをする場合、学生集団に気質的な傾向がある場合、大学に在学している期間内に、いつでも好きな時期に学びたい講義を、受講者が自主的に選択できることが理想であろう。学年進行と開講時期の設定に関して、副専門の各コースに特有な基本的ルールあるいはシナリオといったものを創り出すべきではなからうか。昨年度の教育課程見直しで、この点が改善されつつあるように思うが、少数スタッフで「広範囲な内容をカバーする」という改組再編の理念を字句通りに受けとめるのは現実に合わず、従来的一般教育的体質を保持する限り、現行の副専門教育の方法を少し改善するにも大きな限界を感じる。

4. 複眼的視点から専門教育を補完する副専門の役割

(一般教育と副専門教育)

一般教育の理念には人間形成という大きな目標があった。ここで、生環コースのコース別科目を担当するある教官からの指摘を紹介する。

「主専門と副専門方式さらに旧来の一般教養と学部教

育方式の違いがどこにあるかについて、教官の間に共通の理解があるとは思えない。例えば、副専門課程には主専門課程の卒業研究や論文購読に相当する学部教育の中での到達目標がない。このことは改組の意義を曖昧にしまい、全学的なカリキュラム体系の整合性と一体感を著しくそこねる一因となっていることを感じる。一方、工学における複眼的思考力の養成や基礎学力の総点検が副専門教育の主眼だとするならば、これこそ工学の学部教育の中心テーマにふさわしいと考えるのが現実的ではないだろうか。多くの指摘があるように専門性の追求はすでに大学院博士前期課程に移行しているというのが実感である。工学の守備範囲が時代と共に変わってきていることと、学生の学力や専門意識の激変を冷静にとらえて、無理や無駄の少ないシステムを試していく必要があるのではないか。」

副専門は生まれたばかりの専門であり、既に歴史的な成熟を経てきた主専門とは質と量においてバランスしてはいない。現行教育はもはや一般教育ではない以上、専門性を意識し、主専門との関係を見据えて、教育内容の成熟度を調整し、合理的なレベルの集積として副専門教育を試行し、体系として育てる必要がある。

(主専門と生環コース)

改組再編の現状と課題のなかに、「(主)専門教育と性質の異なる複眼的な視点から専門教育を補完するための副専門科目」を考えるために、生環コースとしては、「最近の生命科学技術の進歩および工業化にともなう環境問題を対象として、「生物と自然との調和ある環境を生み出す視点」から「科学と生命環境」の主題の下に「基礎知識を学ばせ、グローバルな視点に立って社会に奉仕する技術者の養成に資する」と述べられている。そこで、「生命や環境に関する現在の課題を特定の研究テーマに据えて、研究指導する高度の教育活動をする」ことをも、「主専門とは性質の異なる視点」を実質的に打ち立てる、真に生環コースの段階的充実を志向する教育改善になるのではなからうか。

(均衡と相補)

要件単位88対36が、二つの専門知識を獲得するのに合理的なものとは断定できない。従来から専門教育には人格の形成という点で欠けているものがあり、教養の教育が必要との認識で、専門と教養との間に人間の成長という共通の土壌の中で必要な均衡をもたらしした。この均衡を長い間保ってきたのが88対36であった。

一方、主専門教育に対する副専門教育の位置づけとして、副専門はある意味で主専門と互いに相補的な補完関係と考えると、現行の主と副には相補的内容を形成する

体制が備わっていない。先ず、副専門は、(1) 卒業生を送り出す段階に深くは関わっておらず、よって、(2) 学生の大学における学問に対して最終的責任を担っていない。また、主専門は副専門を旧一般教育の枠組みで判断する傾向から脱していない。生環コース志望学生の中には少数ながら生環コースでの研究活動という高いレベルを期待する者がいる。生環コースとしてはこの少数を無視するのではなく、こうした志望の中に、生環コースとしての教育的対応の必要性を認め、一定の役割を担うなら、旧体質の脱却につなげられるのではなかろうか。こうした将来の成熟に備えて、要件単位の設定には、今後の副専門教育課程の改善にともなう「大幅な改訂の余地を保持」すべきであろう。

5. 卒業生像と社会的背景

(卒業生に期待される像の変化)

世の中に二つの分野の専門家といわれる人がいる。また、専門家ではなく”博識”や”通”といわれる人も多い。身近の内外から、これまでの常識では解きえない問題が発生したとき、しばしばこうした人間が必要になる。

高度経済成長の時期から国の内外で、大きな変化のうねりが生じてきた。企業の国際的な展開があり、良い意味の国際化も、また、あまりにも経済優先主義的な、エコノミックアニマルの汚名を戴くこともあった。さらに、核家族化、少子化、文化の多様化、など、国民の生活習慣や慣習の変化も顕在化した。潜在する問題もまた拡大し、複合性を帯びてきている。こうした背景から学生に期待される像にも変化が起きつつある。そうした変化に、学生の反応はかなり敏感であることが志望理由の分析からも感じられる。副専門での大学教育の完了を目指した学生に期待する「卒業生像」には以下のような要因が含まれている。

(強まる総合化の傾向)

総合化とは、一面では既存の専門分野の境界領域に種々の新しい問題を見いだすことである。こうした状況への対処方策として総合性を強めた教育の支柱を立てるのも、副専門の一つの選択である。昨年度の教育課程の見直しにより生環コースのコース別科目の中に社会科学分野の科目などを取り入れた。科学的な因果関係の解明を待たずに、リスクの評価法によって決断をしていく方法は環境や生命の最先端ですでに採られている新しい手法である。識者の指摘に待つまでもなく、社会はこうした変化に向かいつつある。総合化教育の方向にはこうした新しい認識のありかたを学ぶ能力をつけることも含まれている。

(教育完成段階としての卒研指導)

学生はある研究室あるいはある教師のゼミに研究メンバーとして参加し、真に双方向で計画的な学問創造活動へと導入されるなら、学ぶ姿勢も、それまでの一方的受容とは異なるものが備わり始める。完成段階とはこうした変化の兆す時期のことであり、少人数対応型でなければならぬものである。諸々の準備、基礎づくりを終了し、次の段階としての完成へと到達することができるような副専門の教育課程は未だない、かあるいは、そのポテンシャルを現有していない。

6. 改組再編教育組織のもつ歪

(分属教官の特異性)

一般教育組織の一部分が改組にともなって既存の学科に所属替えとなった教官を分属教官とよぶ。分属教官は種々の意味で二重構造の運営形態の下に置かれており、学生からみると全くこうした複雑性に気づく余地もないので、時には戸惑いを感じるようである。現状は、臓器移植手術と似ていて、分属によって即座に一体化できるものでもなく、分属した学科の建物に分属教官の身柄が引っ越しすれば解決する問題でも、また、教官同士が親密に交流すれば解消するものでもない、もっと根深いものがある。分属教官は学科間に存するある種の勢力バランスの中に無造作に注入された均衡破壊危険因子と見られたかもしれない。度重なる定員削減圧力の中で、システムは不利益因子に何よりも敏感になっているであろう。一方、分属させられた者にとっては、「一体化」という表現の中に底知れない不確かなもの、非現実的なものを感じたのであった。これら分属によって生じた二重構造にからむ不具合は、副専門が高度の教育活動へと展開するための「副専門が抱える根本的問題」の一つとして、今後慎重に解決されるべき課題である。

7. まとめ

この4年間改組再編教育課程を担当して、生環コースの抱える問題が分かってきた。昨年度の教育課程の見直しによって、プレゼミナールおよびマンモスクラスなどの問題の解消に向かった。しかし、発足間もない生環コースとしてなお根深い宿題が残されていることを指摘した。とりわけ、生環コースが副専門として成熟するとき、専門教育の充実と主専門に対する位置づけなどについて、今後の課題を指摘した。課題は多いが、これまでのところ進展も確かなことは、将来の展開に希望となる。次期の見直しまでに一步の前進を期して終わりとしたい。